沖縄タイムス社

定価 1,700円

琉球文学の内景

仲程昌徳

イムス選書 15

タイムス選書 15

琉球文学の内景

1982年8月10日　　初版第1刷発行

著　者　仲　程　昌　徳　©
発行者　玉　城　義　弘
発行所　沖縄タイムス社
〒900 沖縄県那覇市久茂地2丁目2番地の2
印　刷　㈱南西印刷

装幀・翁長 自修

まえがき

沖縄に、独自な興味と関心をもって渡ってきた人々は多い。また、それとは逆に、どこに運ばれていくのか皆目わからず、目かくしされたような状態で、沖縄に上陸してしまった人々はさらに多い。前者は、いうまでもなく沖縄に遺る異風さを求めてきた者たちであり、後者は、本土防衛のための守備軍としてである。そして、さらに、沖縄の海と空にひかれ飛んできた人々はなお多いといえるであろう。

そのように、沖縄にやってくるかたちはそれぞれに変わるとはいえ、沖縄と接した人々が多くいるということは、それだけ沖縄が、他と異なっているということを語っているはずである。そして、どのようなかたちであれ、沖縄と関わった者たちは、その沖縄にうながされるかのように、沖縄を書き遺した。

勿論、沖縄を訪れた多くの人々が、すべてそうであったというわけではないが、沖縄に関して様々な文章があらわれてきたことは、確かに、他に類を見ないといえるはずである。

沖縄が、何故そのように多くの者に表現意欲を燃えたたせたのか。戦後については今措くとして、そのことを探るには、まずなんといっても自発的に沖縄にやってきた人々の書き遺したものをみてい

くことが、最もてっとりばやい方法であろう。

それは例えば、柳田国男や折口信夫であり、柳宗悦や伊東忠太、あるいは河村只雄や須藤利一であるというように、様々な分野にまたがる研究者による沖縄論集を読んでいけば、自とそこにあらわれでてくる共通のものがみえてくるはずである。

『新沖縄文学』三七号は、「沖縄研究の先人たち」と銘うち特集を組み、右にあげた人々を含め、チェンバレンから岩崎卓爾まで一八名の著名な研究者をあげ論じているが、その各分野で主だった業績をあげた研究者たちの書き遺したものは、また言ってみれば、格好の沖縄入門書ということにもなるはずである。

しかし、雑誌にあげられた人々だけが、また沖縄を書いたのでないことはいうまでもない。例えばそこには、沖縄にやってきて『琉球諸島風物詩集』一巻をものし、その後も沖縄と関わりの深かった佐藤惣之助がぬけている。それは、雑誌の特集が、研究者に限定しているためでもあろうが、佐藤の詩集も、あえて言ってみれば、沖縄研究によって生まれてきたものであったと言えないこともないのである。

佐藤の『琉球諸島風物詩集』一巻をめくってみれば、すぐに気づくかと思われるが、それは沖縄の言葉をとり入れるための、言葉の研究とでも呼べるものであった。その言葉は、「おもろ」であり、「琉歌」と呼ばれる沖縄の歌謡にみられるものであった。

佐藤は、「私はそこで琉歌をよみ、『おもろ』を知ったことが、私の詩の仕事の上にある面白い現象を投げてくれた」と記す。その「おもろ」や琉歌、民謡等を佐藤に教えたのは「伊波普猷氏、八重

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山の颱風博士岩崎卓爾氏ら」であるという。

佐藤惣之助は、「おもろ」や琉歌を知ったことによって、それらを詩の言葉として使用していくが、しかし「漂客には遂にその土地の深い哀愁はわからぬ。これはその地の中から発した心臓の持主を待たねばならぬ」として、遂に肉迫することの出来ないものがあることを告白し、同時に、沖縄の「おもろさうし」を、「日本の文学博士」が、誰一人として読めるもののないことを嘆いている。そして、その仕事を「幸田露伴氏と與謝野寛氏に期待したい」と述べ、続けて千五百首余ある「おもろ」を、「伊波氏は大半読破してゐる。私はここでもその伊波氏の生涯の仕事を満腔の情をもって尊敬する」と述べている。

佐藤は、自らが旅人であることを認め、その地に遺る歌謡をほとんど理解することのできないことを嘆いてはいながら、よくそれらを使いこなして詩を書くことの出来た人であるが、伊波普猷に対して、ほとんど畏敬の念をもって接していたことがわかる。

佐藤が、「満腔の情をもって尊敬する」といった伊波普猷が、「おもろ」を研究し、やがて一冊の選釈をものすることになるのは、すでに周知の事実であるが、沖縄の研究が、他でもなく沖縄出身者によってなされるようになっていくのは、伊波の力に多くよっていると言えよう。

後世、伊波普猷が「沖縄学の父」と呼ばれるようになるのは、沖縄の本質的な部分をあますことなく手をつけようとしたことにあるが、その中心が他でもなく「おもろ」をより所としてなされていくのはよく知られていることである。

沖縄は、いろいろと大きな問題をかかえ込んでいて、多くの人々を招き寄せてきた。それはまた、

今後もそう変わることはないであろうが、真に沖縄の姿にふれるためには、まずなによりも、沖縄の心を表現した歌謡を見ていくことから始めなければならないのではなかろうか。

佐藤は、少なくとも沖縄のありどころをよく探りあててはいたといえるが、自らいう通り、その土地のこころは、その土地の者によってより深く探られるものであり、旅人には遂に解らぬものがあると嘆かざるをえなかった。

本書に収録した諸論が、果たして佐藤のいう「その土地の深い哀愁」をよく探りあてることのできたものになっているかどうか解らないが、その土地に育った者が、その地により添って書いたものであることだけは小さな声になるが言えそうである。

一九八二年五月

著　者

琉球文学の内景＝目次

まえがき

I 琉歌の章

花風考―〝持上げれば〟の文学性……3
願望の歌人――よしや……15
二つの渦……38
抒情の変容……58
三つの詞華集―「琉歌百控」「疱瘡歌」「古今琉歌集」の姿……73

II おもろの章

おもろにあらわれた比喩的表現法としての鳥……109
まぼろしのはな―沖縄の人の自然観……139

III 組踊の章

乱世のなかの〈夢〉と〈面影〉―玉城朝薫私論……161

Ⅳ　歌と踊りの章

忍ぶ恋―伊野波節……183
南島歌謡にあらわれた女性像……186
ウタの内景―わが島・わが歌……223
新作民謡の表現世界……280

初出誌一覧
あとがき

I

琉歌の章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

花風考

――〝持上げれば〟の文学性――

三重城にのぼて手巾持上げれば
走船のならひや一目ど見ゆる

三重城は、今の那覇港の北側岸壁の最突端にある小高い丘で、「琉球八曲屏風」[1]の「首里及那覇港之図」に、「新重城」と記されているのがそれであろう。

この奇妙な地図は、今から百五十年前の作だといわれている。赤茶けた地の色、うすれた緑の色のさびた古風さ。描かれた城郭や、家並や、松並木は、じっと眺めていると目の前に、新しく装おいたてよみがえってくるような錯覚を起こさせる。

いかにもゆったりとして、往時をよくしのばせるこの奇妙な地図に、どうして「三重城」が「新重城」と書き込まれたのかは分明でない。[2] また、「首里及那覇港之図」に描かれた港の最突端に小高くなった丘が、「城」となっていて、「森」と普通に呼ばれてないのにも少しく疑問があるけれども、とにかく「三重城」が、港の入口にある地名だということははっきりしている。

歌意は簡単で、見送りのできる最後の地点であるこの小高くなった所から、誰か、自分の恋い慕う人を送るのであろう光景を思い浮かべて、その心情を推測すれば、まずまちがいなく歌の核心をつくことはできる。

この歌は、普通の別離の歌とちがって、直に悲しいとか、つらいとか、涙のとどめようもないなどと歌ってない。それでいて、別離の悲しみの情は、どの歌よりも一段とまさっているといえる。

「花風」[3]によく似た歌で、次のようなものがある。

伊舎堂もり登て手巾持上げれば
わが振たる[4]手巾里が振るさ

「吟詠の部」[5]にあるこの歌の、八・八・八・六の前二句は、「花風」に似て変わるところはないが、歌全体の調子は全く異なっていて、琉歌の中でも異例なほど、めずらしくさっぱりとした歌になっている。

歌の意は、伊舎堂の小高い丘に上って手巾を持ち上げると、わたしの振った手巾を見てわたしの恋人も振った、というのである。

この歌にみられる「手巾持上げれば」は、「花風」のそれが手巾を持ち上げたそのことに深い意味があるのに対し、持ち上げた手巾それ自体に意味が含まれるのでなく、完全にそれに伴なって起こる動作を予期し、次の句に流れ込む発句となり、主となるものはその後に続く「手巾里が振るさ」の手

巾を振る動作にある。そのために、他の琉歌に類をみないさっぱりとした明朗な歌になっていると思われる。

「振る」について、島袋盛敏はこの歌に触れながら「男女の愛の信号（この言葉はあまりおもしろくない――引用者）として、布片や袖を振ってみせたことは、大和時代の大昔からあった風習である」として、万葉集巻一と巻二から額田王[6]、柿本人麻呂[7]の歌をひいて傍証している。

琉歌において、「袖」は別にして「手巾」だけを調べてみると、直接に「振る」で表現された歌はこれ一つで、あとにも先にもない。他はみんな「持上げる」になっている。表現において、「手巾」がどうして「打ち振る」、または単に「振る」にたやすく結びついていかないで、「持上げる」で多くとどまっているのかが問題になるが、今はそこまで先走らないで、「持上げる」表現だけについて考えてみたい。

「花風」が、他の歌とちがってすばらしい結晶をみせていることを立証するためには、他の「持上げる」表現の用例をあるだけ挙げてみればよい。そうすれば、同じ言葉を用いていても、歌全体の結晶度がまったくちがうことが明らかになるはずである。

手巾持上げれば与所の目のしげさ
かしらとりなづけ手しやい招け

歌意は、「手拭を持ちあげてふると他のみる目が多いので、髪をかきあげるふりをして手でまねこ

う」[8]というのである。

この場合の「手巾持上げれば」にしても、やはりそれは、「手しやい招け」の動作への移行としてあるもので、「手巾持上げれば」という句自体に重みがあるといえるものではないと思える。

そのため、この歌も前の「伊舎堂もり登て」の歌と遠く離れてあるものではない。公然とした交際のできないことはつらいにしても、かえってそのために相会う楽しさというものがふくれあがってくる、朗らかさがあり、「花風」の「手巾持上げる」とは自ら違うものとなっているといえよう。

真物ざな登て円覚寺見れば
かくれすみぼさが手巾ちやげさ

「真物ざな」は「真物あざな」で、元の琉球大学共済会食堂の立っているあたりにあったという物見台で、所の名。「ぼさ」は「坊主」である。「ちやげさ」は、語頭の「も」が脱落したかたちで「持上げる」と同じ。歌意は、物見台に上って円覚寺を見ると、修養中の坊主が手巾で合図をしているよ、というのである。

この歌の場合にしても、「手巾ちやげさ」の句は、相手の意思表示をうながす動作へ流れ込んでいって定着するに過ぎない。というより、相手の反応を確かめようとする気持のあらわれになっていてこの歌の場合、こちらに関係がないために、幾分揶揄的な調子を帯びたものになっている。ということは、「手巾ちやげさ」が「ちやげさ」だけでは、どうしても「花風」のように行かず、重みの欠除

を感じさせてしまうということである。

「手巾持上げる」表現の用例は、「節組・吟詠の部」をあわせてもわずか四首にすぎず、その不思議な感情表現は、歌の良し悪しにかかわらず、琉歌の中で、特異な位置を占めるものであることは言うまでもない。その中で、とくに「花風」は、類のないすばらしさを燦然とあたりに放っているといえるのである。

一読して、心の琴線をかきむしられるような歌「花風」の魅力は、一体どこにあるのであろうか。ここで、あらためてその魅力を探ってみたい。

「花風」は、静と動との鮮やかな対照を読み込んでいながら、恐ろしいほどに静的であり、しかもそれが、張りきった心の緊迫感でいっぱいになっている。

まず、八・八音上句であるが、それは次のようになっている。

三重城に登て手巾持上げれば

傍点をうった箇所「登て――持上げれば」は、他の歌と同じだが、「花風」が他の歌とちがって特異なのは、「持上げれば」が「持上げれば」のままで、その感情、動作ともにどこにも動いて行こうとせず、そのままで静止しているてんにある。それは、相手に何らかの動作を求めるものでなく、ただそのことのみに意味がある。悲しみで体はこはばっている。慟哭はない。歔欷もない。ただ、どうしようもない悲しみがあるだけで、持ち上げた手巾が、持ち上げたままで静止してしまっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.